

## 創立50周年記念劇 「わたしの戦争時代」

○ ナレーション（6年担任 作成）

60秒

ここに1冊の本がある。「わたしの戦争時代」。昨年度、50周年を迎える記念として、この八名地区に住まわっている方を中心に、戦争体験を聞き、その方々の思いを綴ったものです。この本には、約50名の方々の、今では想像しがたい、つらく悲しい体験がおさめられています。戦争を知らない私たちは、この本を通して、また、今回演じる「わたしの戦争時代」を通して、初めて戦争というものにふれました。50周年を迎える機会に、私を感じる戦争への思いを、この劇でできる限り表現したいと考えています。ご覧ください。

	<b>&lt;第1場面&gt; 文江さんに戦争のことを聞く子ども</b>	（幕前で） 1分30秒
子ども① 女	「文江おばあさん。おばあさんはいくつになられるのですか。」	
文 江①	「今年で90になったよ。」	
子ども② 男	「おばあさんのご主人は、戦争で亡くなったって聞いたけど、本当ですか」	
文 江	「ああ、そうだよ。ずいぶん昔のことだけど、その頃のことはよく覚えているよ」	
子ども① 女	「わたしたちは今、戦争時代のことを調べているんです。その頃のことを教えてくださいませんか。」	
文 江	「そうかい。私にとっては、悲しいことばかりだったから、あんまり思い出したくもないが、私もあと何年生きられるか分からない。話ができるのはうれしいことだ。じゃあ、聴いてくれるかい？」	
子ども② 男	「ありがとうございます。お願いします。」（うなずき合う）	
文 江	「あれは、昭和18年。今から67年も前のことだよ。あんたたちと同じ小学生は富岡国民学校へ通っていたよ。私の妹がちょうど6年生だったけど、授業よりも作業や訓練が多かったそうだよ。」	2分40秒 （中幕前）
	<b>&lt;第2場面&gt; 富岡国民学校運動場</b>	音楽 愛国行進曲
	<b>朝 礼</b> 軍歌に合わせて行進している（愛国行進曲だんだん大きく）	
鈴木先生	「全体～、止まれ。前～ならえ！」（級長は半回転して、曲がり直す）	
鈴木先生	「列が曲がっとなるのは、心がたるんだ証だ。しゃんとしろ！」	
鈴木先生	「おはようございます」	
児童全	「おはようございます」（大きく元気な声で）	
鈴木先生	「全員、右向け一、右。皇居に向かって、最敬礼」（最敬礼：45度美しく）	
鈴木先生	「なおい！」	
鈴木先生	「昭和18年5月22日 朝礼を始める」 「校長先生のお話」	
校 長	「諸君は、朝に夕に、奉安殿に向かってきちんと敬礼をしておるかな？」	
児童全	「はい」	
校 長	「恐れ多くも天皇陛下におかれましては（一斉に気をつけの姿勢）われわれ国民のために、ありがた～いお言葉をお与えくださっておる。」	
校 長	「八紘一宇」（はっこういちう）「今日は、この言葉を覚えること」	垂れ幕で紹

校長	「言ってみなさい」	介	
児童全	「八紘一宇」		
校長	「八紘一宇」というのは、世界を一軒の家のようにすることだ。つまり、天皇陛下を（気をつけの姿勢をとる）家長として、世界が仲良く平和に暮せらせるようにするために、日本は戦争をしているのだ。だから戦地の兵隊さんのことを思い、決してぜいたくはしないことだ。よろしいか。」		
児童全	「はい！」（校長 満足そうにならずいて、鈴木先生に目で合図）		
鈴木先生	「気をつけ、礼」（きびきびと）		
鈴木先生	「では、教室に入りなさい。」「前へ～、進め！」		
児童全	「いち、にっ、いち、にっ！」（掛け声をかけ、行進をして退場）		
	<b>竹やり訓練（教練）</b> （男子は竹槍を持って戻る 6時間目の表示）		6 限表示 2分10秒
野沢先生	「気をつけ～、誠、姿勢が悪いぞ。」		
男子① 誠	「はい、すみません。」		
野沢先生	「今日は竹やり訓練を行う。につっきアメリカ軍がきたら、我々は竹やりで戦う。では、重利から順番に、心構えを言ってみろ！」		
男子② 重利	「はいっ、一億一心、最後の一人になってもあきらめません。」		
男子③ 正男	「武器がなかったら、アメリカ兵ののどに、嚙みつきます。」		
男子④ 健	「天皇陛下のために、死ぬまで戦います。」		
野沢先生	「よし、それでこそ日本男児だ。では、このわら人形をアメリカ兵だと思って突け。」「正男、持ってろ！」		
男子③ 正男	「はいっ！」（わら人形を持つ）		
男子① 誠	「え～い！」（弱弱しく突く）		
野沢先生	「ばかもん、そんなへっぴり腰でやっつけられると思うか。次！」		
男子② 重利	「えい、やあ。」		
野沢先生	「よ～し、今の気合いはよかった。ただ、アメリカ人は背が高い。もう少し上に向って突け。それに突いたらひねるようにしろ。ひねらないとトドメを刺せん。分かったか。」		
子ども全④	「はい。」	鐘の音 (カラン カラン)	
野沢先生	「次」 「次」 （ひねるようにする） ～ 終了の鐘が鳴る ～		
野沢先生	「よし、これまで。今練習したことを、忘れないこと。」		
児童全④	「はい。」		
野沢先生	「今日はこれで帰ってよらしい。」		
男子② 重利	「ありがとうございました。」		
児童全④	「ありがとうございました。」		
男子② 重利	「先生、さようなら。」		
児童全④	「さようなら」		
野沢先生	「さようなら」  (黙ってきちんと片づける)		

<b>&lt;第3場面&gt; 帰り道</b>		1分30秒
<b>(1) 男子グループの会話</b> (少しテンポの速い会話で)		
男子① <small>はじめ</small> 一	「あ～あ、つかれた。毎日毎日、教練や作業ばかりで嫌になっちゃうよ。」	
男子② 重利	「それにさあ、野沢先生ったら、教練になると、やったら張り切るもんね。」	
男子③ 正男	「ほ～んと、疲れるよな。」	
男子④ 健	「まあ、そういうなよ。おれなんか頭悪いからさ、勉強より、教練の方がずっといいよ。」	階段から下り始める
男子① 一	「たけちゃんは、少年航空兵があこがれだもんね。」	
男子④ 健	「そうさ。俺は絶対に予科練に入るんだ。七つボタンの真っ白い軍服着てさあ、カッコいいよな～。」 (歌い出す)	
男子④ 健	「♪ 若い血潮の予科練の ♪」	
男子② 重利	「わかった、わかった。最近、いっつも若鷲の歌だもんな。」	
男子④ 健	「♪ 七つボタンは桜に錨 今日飛ぶ飛ぶ……」 (他の二人もつられて歌い出す。楽しそうに演じる)	(階段下で客席に向かって歌う)
男子② 重利	「もう、いっちょゅうの。」	
男子③ 正男	「だけどさ、予科練に入るにはすごい競争で、頭が良くないと試験に受からないらしいよ」	
男子④ 健	「えーっ、そうなの？それじゃあ、ぼくの頭じゃあだめかなあ。」 (適当に話す。そんなことないよ、等)	メンコ始める
※ メンコをしている子どもたち2人 (左手階段下で)		
<b>(2) 女子グループの会話</b> (男子退場前に入り、間を開けない)		1分00秒 (中幕前)
女子① 百代	「ね～え、す～ちゃんとか、衣料切符使ってる？」	
女子② すす子	「それがさあ、点数はあっても配給がちっともこなくて、使いたくても使えないみたいよ。」	
女子① 百代	「やっぱりね、私なんかず～っと同じ服ばかり。新しい服がほしいのに、ぜんぜん配給ないもんね。」	
女子② すす子	「そうじゃん、私だって運動靴がほしいよ。じいちゃんが毎晩わらじ作ってくれるけど、わらじは足が痛いし、すぐにダメになっちゃうでしょ。」	
女子① 百代	「だめだめ、そんな文句ばかり言ったら、非国民って言われるわよ。」 『ほしがりません勝つまでは』 でしょ！」	
女子② すす子	「そうね、ぜいたくは敵だもんね。」 (がまん、がまんと言いながら下手へ退場)	
<b>(3) 女子グループの会話</b> (退場前に入り、話し始める)		2分10秒
女子③ 久子	「ねえ、ねえ。いっちゃんとお父さんに赤紙が来たって。」 (声をひそめて)	階段下から歩きながら
女子④ 信子	「そうなの？ あそこは、子どもが5人よ。お父さんがいなくなったら大変ね。」	
幸 子	「うちの近くの白井さんとこと、浅井さんとこにも来たって。」	
女子③ 久子	「となりの岡本さんとこは、二人目の赤紙だって。」	
女子④ 信子	「ほんとに？もし家に来たらどうしよう。」 (不安そうに話す)	
幸 子	「のぶちゃんは、今からどうするの？」 (普通の声で 階段を上りながら)	

女子④ 信子	「わたしはヨモギとりをして、それから、ごはん炊きよ」	階段上がる
女子③ 久子	「わたしは、オカイコの世話よ。」	
幸 子	「わたしは姉さんとここに寄ってくわ。赤ちゃん、すごいかわいいよ。でもね、この前おしめを替えてたら、いきなりおしっこかけられちゃった。」	
女子④ 信子	「へえー、どこに？」	
幸 子	「それがね、顔にドバツって、直撃よ」 (笑いながら)	
女子③ 久子	「やだ〜っ、もう。でも見たかったあ。」 (笑い)	
幸 子	「もう、何言ってるのよお。じゃ、また明日ね。バイバ〜イ。」 (右左に別れる)	
女子二人	「さようなら」 「さようなら」	
	(プロジェクター用意 山本昇さん提供と入れる)	
ナレーター①	赤紙とは、召集令状のことです。赤い紙に印刷されていたので、そう呼ばれました。出征兵士は、赤紙を持って指定された軍隊に行くことになっていました。	
ナレーター②	戦争の初めの頃は、赤紙は次男や三男に届きましたが、戦局が悪くなると、年齢の高い人や長男、体の弱い人にも来るようになりました。 ここは、文江さんの家です。	中幕開き始 める
	<b>&lt;第4場面&gt; 文江さんの家 (舞台中央から右に家を置く)</b> (文江、子どもをおぶっている。そこへ妹が来る)	3分10秒
幸 子	「こんにちは」	
文 江②	「あ、さっちゃん、いつもありがとうね。赤ちゃんの面倒をみてくれると、本当に助かるわ。でも、今日は仕事のキリがついたから、子守りはいいわ。そうそう、(イモを新聞紙に包む) これを持ってお帰りなさい。」	
幸 子	「ありがとう。私、おイモ大好き。」	
文 江	「在所のおじいちゃん、おばあちゃんによろしくね。」	
幸 子	「はあ〜い、また明日来ます。さようなら。」 (玄関を出る) (鍬をかついで家に帰る利夫とすれ違う)	
幸 子	「あ、おかえりなさい。」	
利 夫	「やあ、さっちゃん、いつもありがとうね。」	
幸 子	「今、お姉さんにおイモもらっちゃった。」	
利 夫	「そう、よかったね。宏和の子守り、時々頼むよ。」	
幸 子	「はあい。じゃ、さようなら。」 (うれしそうに) (利夫、振り向いて見送る)	
利 夫	「今帰ったよ〜。」	
文 江	「おかえりなさい。疲れたでしょ。今、ごはんにしますからね。」	
利 夫	「ああ、じゃ、宏和をみるよ。」 (おんぶひもを解いてもらってだっこする) 「そこで、さっちゃんに出会ったよ。いつも明るい子だね」	
文 江	「そうね。よく気がつくしね。宏和もあんな子に育ってくれるといいわね。」	
利 夫	「宏和は男だから、たくましく育ってくれればいいよ。なあ、宏坊。パー、かわいいね。お父さんそっくりで、かわいい。パー！」 (子どもをあやす利夫 ごはんの支度をしながら会話)	

文 江 利 夫	このごろね、年配の人にも赤紙が来るようになったけど、家は大丈夫かしら」 「大丈夫さ。自分は長男だし、3人だけで住んでいるんだから。こんなかわいい 子をおいていけるもんか。なあ、宏坊。かわいいなあ。お父さん、そっくり」 「またあ、利夫さんって、本当に親ばかだね」 (無言で演技を続ける)	(台所で作 りながら)
文 江		舞台そのま ま続ける
ナレーター③	それからしばらくたった昭和18年5月30日のことです。文江さんの家に、 恐れていた赤紙が届いたのです。召集令状を届けていたのは兵事係で、八名井の 宮城さんでした。戦後、新城町の助役を務められた方です。	
	<b>召集令状が届く</b>	2分40秒
兵事係	「戦死された遺骨を届けるのは、一番つらいが、令状を届けるのもつらいもんだ。 ここのお宅は、結婚されたばかりで、赤ちゃんもいるというし……。」	
兵事係	「こんにちは 利夫さんのお宅ですか。」	
文 江	「は〜い。そうです。」 (台所から出てくる)	
兵事係	「おめでとうございます。召集令状を持ってまいりました。」	
文 江	「え〜っ！」 (驚き すくんでしまう)	
兵事係	「奥さん、大丈夫ですか」 (利夫：宏和を抱いたまま出てくる)	
利 夫	「利夫ですが。」	
兵事係	「利夫さんに召集令状です。お国のため、立派にお務め下さい。」	
文 江	(ショックでおろおろしている)	
利 夫	「ご苦労様です。謹んで受け取らせていただきます。」 (毅然として大きな声で)	
兵事係	「中をよく読んで、準備をしてください。」	
利 夫	「ありがとうございます。しっかり準備いたします。」	赤ちゃんの 泣き声
兵事係	「では、失礼します。」 (兵事係が帰る)	
文 江	「利夫さん。何で利夫さんに、何で利夫さんに」 (手が震える しがみつく)	
利 夫	「それを言っはいかん。お国のために働く時が来たんだ。召集は名誉なこと。 自分だけが逃げるわけにはいかん。」	泣き声小さ く
兵事係	(すぐに立ち去らず、ここまで聞き、ていねいに礼をして下手へ去る)	
文 江	「分かっています。でも、こんな小さな子をかかえて、田んぼだって畑だって、あ なたがいなかったら、私一人で、私一人で、できるわけないじゃない。 どうすればいいの。どうすればいいのよ。」 (ぼう然と立ちつくす 赤ちゃんの泣き声)	大きく
	(暗転)	
ナレーター④	出征の日は、1週間後の昭和18年6月7日でした。準備に追われ、あっとい う間に日が過ぎたそうです。武運長久の日章旗や千人針が用意され、利夫さん は、軍人勅語を必死に覚えました。出征前日の夜のことです。	
	<b>出征の前夜</b>	3分00秒
文 江	「利夫さんが大好きな、おしる粉を作りましたよ。」	
利 夫	「ほお〜っ、何年ぶりだろう。しるこが食べられるなんて。」	

文 江 利 夫	「在所のお母さんが砂糖をくれたのよ。おいしいものを作ってやりなさいって。」 「そうか、そんな心配をしてくれたのか。ありがたいことだ。」 (手を合わせる)	
利 夫 文 江 利 夫	「それにしても、今夜の月は、何てきれいなんだ。」 「ほんとに、きれいな満月ね。」 (少し間) 「どこへ行ってもお月様はいっしょだ。お月様が出たら、文江と宏坊のことを 思い出すよ。」 (箸を取る)	
文 江	「私もお月様を見て、利夫さんと話します。」 (利夫もうなずき、おしる粉を食べる)	
利 夫 文 江 利 夫 文 江	「う～ん、うまい。こんなにうまいおしる粉は、当分食べられないだろうな。」 「……………」 (涙を見せまいとする) 「本当に苦勞をかけるが、宏和のこと、家のこと、くれぐれも頼む。」 「私にできるか分かりませんが、必死に働きます。利夫さんも、存分に働いてきて ください。でも、きっと帰ってくださいね。宏和とっしょに、待ってます から」 (気丈に話す 顔を見つめ合って)	
利 夫	「分かった。きっと帰ってくる。たとえ九分九厘だめでも、最後の1厘に望みを かけるようにするよ。宏坊に顔を見せなきゃ、忘れられちゃうからなあ。なあ 宏坊、ばあ～！かわいいなあ。」 (中幕閉める)	
ナレーター⑤	出征する人がいると、兵隊送りが行われました。兵隊送りは村ごとに行われ、 村長さんや村の人、親せきの人が集まり、小学生も参加しました。	
ナレーター⑥	富岡では、車神社で必勝祈願をし、隊列を組んで清水野国民学校の前まで行き ました。出征は名誉なことだから、涙を見せてはいけないと言われていました。	
ナレーター⑦	悲しい別れなのにお祝いしなければいけなかったのです。でも、小さな子ども に、理解できることではありませんでした。	
	(階段前, 会場通路使用)	
	<b>&lt;第5場面&gt; 兵隊送り</b> (出征兵士, 村長, 祖父母, 子ども達) (校旗, 幟を先頭に子どもの楽隊, 出征兵士, 見送りの人が隊列を組む) (演奏と歌でにぎやかに行進する。手旗を持つ。会場の人にも配る。)	4分20秒 中幕前 階段も使う (演奏)
	露營の歌 「勝ってくるぞと勇ましく 誓って国を出たからは 手柄たてずに死なしょうか 進軍ラッパ聞かたびに まぶたに浮かぶ 旗の波」 (出征兵士と対面で 村長, 役員, 見送りの人たち, 子どもたち, 家族)	
村 長	「利夫君, さとし君, お国のために立派に働いてきてください。」 「それでは, 両君のいやさかを祈念して, 万歳を三唱する。 利夫君, さとし君 バンザーイ! バンザーイ! バンザーイ! 」 (拍手)	

利夫 さとし	<p>(二人は深々と礼)</p> <p>お見送り、ありがとうございます。立派に務めを果たしてきます。」(敬礼)      天皇陛下のおんために、一身を投げ打って戦ってまいります。本日は、お見送りくださり、誠にありがとうございました。では、行ってまいります。」</p> <p>(敬礼の後 歌い始める)</p>	音楽に合わせながら演奏する
女の子	<p>&lt;出征兵士を送る歌&gt; わが大君に召されたる 命はえある朝ぼらけ      たたえて送る一億の 歓呼は高く天を衝く      いざ行け つわもの 日本男児</p> <p>(利夫、文江 互いに見つめ合う)</p> <p>(出征兵士：敬礼をして出発し始める：1番終了後)</p>	ボリューム下げる
母親 母親 子ども	<p>「お父ちゃん、いっちゃあいかん！」 (父を追う子ども)</p> <p>「行っちゃあいかん！、行っちゃあいかん！」 (追いかけようとする)</p> <p>「だめだって言ったでしょ。だめだって言ったでしょ。」(必死に止める)</p> <p>「父さんが困るでしょ。お願いだから、がまんして！ お願いだから。」</p> <p>「お父ちゃん、行っちゃあいかん、行っちゃあいかん！ 「わ～ん！」</p> <p>(母親をたたきながら泣く。母親も泣きくずれながら抱きかかえる。周囲の大人も目頭を押さえる)</p>	ボリューム下げる
文江 子ども	<p>「利夫さん……………」 (声に出さず、耐えながら手を振る静香さん)</p> <p>出征兵士を送る歌 (日の丸の小旗を振りながらだんだん大きく歌う)</p> <p>「お父ちゃ～ん！ お父ちゃ～ん！」 (しばらくの間、泣きながら見送る)</p> <p>(演技力期待)</p>	(演奏) (暗転)
ナレーター⑧	<p>「こうして、利夫さんたちは出征していきました。出征は、めでたいことと言われても、家族にとっては、どれほどつらかったことでしょうか。(中幕開く)</p> <p>二度と会えない別れになるかもしれないのですから。</p> <p>(文江 幕前で無言で畑仕事をする) (クマゼミの鳴き声のみ)</p>	中幕開き始める クマゼミ 舞台下手前
ナレーター⑨	<p>文江さんの家には、実家の妹「幸子さん」が入りました。それでも、赤ちゃんを抱え、田畑の仕事、家事のいっさいを文江さん一人でしなければなりませんでした。</p>	
ナレーター⑩	<p>(額の汗をぬぐいながら畑仕事、その後下手へ退場)</p> <p>出征してしばらくすると、利夫さんから手紙が届きました。戦地からの手紙やハガキは軍事郵便といって、軍の検閲がありました。</p>	(文江交代)
郵便屋さん 文江③	<p>&lt;第6場面&gt; 手紙 文江さんの家 (舞台)</p> <p>ア 満州からの手紙</p> <p>「奥さん、郵便で～す。」</p> <p>「ごくろうさま。初めての便りだわ。(ハガキ見る) 満州の遼陽にいるのね。」</p>	2分10秒

手紙①	(プロジェクターでハガキを映す。録音しておくのもよい。) 「なかなか忙しいだろうと推察する。おかげで元気いっぱいだ。413部隊に編成されたから安心してくれ。気がかりなのはお前の苦労性だ。絶対、無理と心配は禁物。お前一人で苦労してくれるな。写真を7枚送った。こっちへも1枚送ってくれ。宏坊とはなれていると、どうにもかわいい。」	PJで写す
文江	「私のことばかり心配して。宏和の写真を送らなくっちゃ。」	
ナレーター⑪	文江さんが写真を送りました。(写真を映す) すると返事がすぐに届きました。(ハガキを映す)	PJで写す
手紙②	「健在を喜ぶ。自分も相変わらずだ。写真、よく撮れている。宏坊を見違えてしまった。よその子ではないのか。」(間)	
ナレーター⑫	軍事郵便には消印がありませんが、次のハガキは、文面から昭和18年の10月ごろと分かります。	PJで写す
手紙③	「稲も実る頃となったな。ジネンジョ、柿、マツタケと、秋はことさらふるさとのことが思われてならない。こちらは懸念には及ばぬ。すべてに満足している」 (舞台暗転)	
ナレーター⑬	<b>イ フィリピンからの手紙</b> 満州から届いた便りは、30通以上になりました。昭和19年になると、しばらく便りが途絶え、久しぶりに届いたハガキは、フィリピンからでした。 (ハガキ映す)	3分10秒 PJで写す
手紙④	「しばらくだ。元気で頑張っているから安心してくれ。南十字星のきらめきに、ヤシの葉風、南国の情緒豊かな常夏の国で、珍しいものばかりだ。私物と貯金通帳を送った。お前らの多幸をくれぐれも祈る。」	
文江	「利夫さん、フィリピンにいるんだ。でも、なぜ貯金通帳を送るのかしら。いやな胸騒ぎがするわ。」	
ナレーター⑭	このころ、南方の島々はアメリカ軍の反撃にあっていました。7月には、サイパン島が玉砕。日本軍は、島々の奪回を図るため、満州や中国から軍隊を南方に送りました。利夫さんの部隊もその一つでした。 (レイテ島の戦いの映像を流す)	映像 1分40秒
ナレーター⑮	しかし、新聞やラジオは日本軍の敗戦を伝えず、日本ではだれもが戦争に勝っていると思っていました。	
ナレーター⑯	フィリピンからの便りは、わずか4通でした。ハガキにあった私物と貯金通帳も届きませんでした。そして、次のハガキが最後の便りとなりました。 (音楽：硫黄島からの手紙)	PJで写す 音楽
手紙⑤	「本当にしばらくだ。お前らも健在のことと思う。自分もどうかこうか頑張っているが、(墨で消されている) くれぐれも言っとくが、心配は禁物だ。次の幸便で、50円ほど送った。第一線とはいえ、不自由のない日々感謝している故、小僧に何か買ってやってもらいたいと思っている。」	
ナレーター⑰	検閲のため、軍にとって都合の悪いことは消されました。書いてはいけないと	



ナレーター⑱	<p>されたのは、所在場所、戦争の状況、健康状態が悪いことなどでした。 利夫さんがいたレイテ島は、アメリカ軍に包囲され、日本軍は次第に山奥へ追い詰められました。ここはレイテ島です。</p>	
利夫 兵隊	<p><b>&lt;第7場面&gt; フィリピンの戦場</b></p> <p>「ああ、何ということだ。食べるものはない。鉄砲の弾もない。部隊もバラバラだ。もう自決するか、飢え死にするか、どちらか一つだ。」</p> <p>「いくら勝ち目がなくても、白旗を掲げるわけにはいかない。『生きて虜囚の辱めを受けず』だ。利夫、俺は先に行くぞ。もし、お前が生きて日本の土を踏めたら、ふるさとのおっかあに俺の死にざまを話してやってくれ。頼む。」</p> <p>「天皇陛下バンザ〜イ！」 「おっかあ、さようなら！」</p> <p>(悲痛な叫びで手榴弾をヘルメットでたたき、腹に抱え裏側へ ~自爆)</p> <p>(間をおく)</p>	<p>2分30秒 中幕前 爆撃機の音</p>
利夫	<p>「お、おれだって、いさぎよく死にたい。飢え死にはいやだ。」</p> <p>(手榴弾を振りかざしてヘルメットにたたきつけようとする。しかし、手が震えてできない。泣き崩れる)</p>	<p>(爆発音) 音楽流し始める (海ゆかば)</p>
利夫	<p>「くううう〜」 (写真を取り出す)</p> <p>(写真を見てふるえながら泣く。自決しようとしてもできない利夫を演じたい) (プロジェクターに家族の写真を写す)</p>	<p>PJで映す</p>
利夫	<p>「文江〜！ 宏和〜！」 (くずれるようにへたれ込む)</p> <p>(音楽を大きく流す) (演技力期待)</p>	<p>(暗転)</p>
ナレーター⑲	<p><b>&lt;第8場面&gt; 本土空襲から終戦へ</b> サイドスクリーンで映像</p> <p>アメリカ軍の攻撃はすさまじく、南方の各地で日本軍が壊滅しました。</p> <p>昭和20年に入り、海と空を完全に支配したアメリカ軍は、次に沖縄を攻め、さらに本土を空襲するようになりました。</p>	<p>1分40秒 PJで映す</p>
ナレーター⑳	<p>日本中の都市が焼け野原となりました。名古屋も豊橋も、豊川の海軍工廠も空襲にあいました。そして、8月6日に広島、9日には長崎に原子爆弾が落とされました。</p>	<p>映像を見ながら説明</p>
ナレーター㉑	<p>昭和20年8月15日、ついに日本は降伏しました。天皇陛下の玉音放送を、八名の人たちは、それぞれの思いで聞きました。敗戦からしばらくすると、戦地から帰ってくる人たちがいました。</p> <p>(文江 舞台左手前で畑仕事をしている)</p>	<p>幕を開け始める</p>
	<p><b>&lt;第9場面&gt; 無言劇</b> (畑の前の道を通り過ぎる形で)</p> <p>① 遺骨となって戻る人も (無言で演技) 白木の箱を遺族が持ち、数名で階段下を歩く</p> <p>② 復員する人を 万歳で迎える人も (ジェスチャーのみで) 「おーい、けんちゃが帰ってきたぞ〜」 (声をかけ合い、喜び合う)</p>	<p>1分00秒 音楽流す ① 階段下 ② 舞台</p>

	<p>③ 遊んでいる子ども (メンコか石けり)</p>	<p>③ 階段下 ほぼ同時に 演技する</p>
<p>文 江 ナレーター②</p>	<p>それを横目に見ながら、子どもを負ぶってけん命に畑仕事をする (時折、手ぬぐいで汗をぬぐう) 少しして (鍬をかついで家に入る) 文江さんは、利夫さんの帰りを今か今かと待ち続けました。しかし、半年経つても、1年経っても、何の音さたもありません。終戦から2年あまり経った昭和22年、12月のある日の夕方のことです。</p>	
	<p style="text-align: center;"><b>&lt;第10場面&gt; 戦死の知らせ</b></p>	<p>5分20秒</p>
<p>兵事係</p>	<p>「ごめんください」</p>	
<p>文 江</p>	<p>「はあい。どなたですか。」</p>	
<p>兵事係</p>	<p>「兵事係だった宮城です。今日は大事なお知らせがあつて参りました。」</p>	
<p>文 江</p>	<p>「ご苦労様です。どうぞ、お上がりください。」</p>	
<p>兵事係</p>	<p>「いえ、ここで失礼します。奥さん、ご主人はお国のために戦い、立派な最期を遂げられました。これがご主人の戦死証明書です。お受け取り下さい。」</p>	
<p>文 江</p>	<p>「主人は、いつどこで亡くなったのでしょうか？」</p>	
<p>兵事係</p>	<p>「フィリピンのレイテ島のようなのですが、詳しいことは分かりません。」</p>	
<p>文 江</p>	<p>「戦死された家には、戦友がみえて、いろいろ教えてくださると聞いてますが、わたしの家には誰も来ないんです。」</p>	
<p>兵事係</p>	<p>「申し訳ありません。私にも分かりませんので。」</p>	
<p>文 江</p>	<p>「そうね、宮城さんに言っても仕方ないわね。」</p>	
<p>兵事係</p>	<p>「では、失礼します」</p>	
	<p style="text-align: center;">(文江、部屋に入り封筒を開けて読む)</p>	
<p>幸 子</p>	<p>「お姉さん、なんて書いてあるの？」</p>	
<p>文 江</p>	<p>「フィリピン レイテ島 カンギポット山にて戦死。昭和20年7月1日」</p>	
<p>文 江</p>	<p>「これだけなのよ。遺骨も、遺書もない、形見の品もない。こんな紙切れ1枚で、信じろというの？ ねえ幸ちゃん、信じられるわけないでしょ。」</p>	
<p>幸 子</p>	<p>「そうよ、何の証拠もないんだから。それに、葬式を済ませた後で、帰ってくる人だっているんだから。」</p>	
	<p style="text-align: center;">(文江：うなずいて)</p>	
<p>文 江</p>	<p>「私ね、『今帰ったよ!』って、利夫さんの声が聞こえるの。しょっちゅう聞こえるの。だから、きっと帰ってくる、そう信じてるの。」</p>	
	<p style="text-align: center;">(間をおく)</p>	
<p>文 江</p>	<p>「宏和が向こうの部屋にいるから、そろそろねかせて、休みましょ。」</p>	
<p>幸 子</p>	<p>「は～い、じゃあ、お休みなさい。」</p>	
	<p style="text-align: center;">(部屋を出ようとして立ち止まる)</p>	
<p>幸 子</p>	<p>「でも、お姉さんって、本当に強いよね。絶対に涙を見せないし、何もかも一人でやっちゃうんだから。」 (文江 首を横に振る)</p>	
<p>幸 子</p>	<p>「おやすみなさい」 (言いながら隣の部屋へ行く)</p>	
<p>文 江</p>	<p>「おやすみ」 (しばらく針仕事をする。) (間 10秒程度)</p>	<p>時計の音</p>

	(時計を見る。隣の部屋をのぞいて、寝静まったことを確かめてから、もう一度封筒を開ける)	
文 江	「フィリピン、レイテ島 カンギポット山にて戦死 昭和20年7月1日」 「利夫さんが亡くなったなんて、何も残されてないのに、信じるもんですか。」 「利夫さんは、九分九厘だめでも、残りの1厘にかける人よ。」 (間) (音楽 硫黄島からの手紙 流し始める)	音楽 (硫黄島からの手紙)
文 江	「ねえお月様、利夫さんは絶対に生きてるよね。生きてるよね。……………」 生きてるよね……………」	
幸 子	(肩をふるわせ、声を出して泣く。少ししてふすまの間から幸子がのぞく。 嗚咽する文江を見て、声を出さずに泣き始める。手で顔を覆う、涙をぬぐう) (利夫さんの写真映す)	
文 江	「今帰ったよ！ 今帰ったよって、言って…………… お願い……………」 (30秒以上間をおく 演技力期待) (音楽に合わせて暗転) (ナレーター 間をおいてから出る)	PJで映す  (暗転)
ナレーター⑳	終戦から2年4ヶ月も経った昭和22年12月20日、村長さんがみえて形ばかりの葬儀が行われました。利夫さんがどんな最後を迎えたのか、今も手掛りは何ひとつありません。	
ナレーター㉑	当時、レイテ島にいた日本軍8万4000人のうち、生きて帰れた人は、わずか5000人でした。7万9000人ものが亡くなりました。利夫さんが戦死したとされるカンギポット山は、残っていた1万人の兵士が、最後に追い詰められた山だったのです。	
ナレーター㉒	その山から生きて帰った兵士は、ほとんどいなかったそうです。そのため、手掛りが何もないのです。確かなことは、補給が絶たれ、武器も弾薬も食料も、何一つなかったことです。	
文 江①	<b>&lt;第11場面&gt; 文江さんに戦争のことを聞く子ども</b> 第1場面と同じ	1分50秒
子ども②男	「戦争はむごいもんだよ。人が人でなくなり、殺し合いをする。一人が亡くなれば家族が悲しむ。この戦争で、どれほどたくさんの涙が流されたことだろうね。1億玉砕なんて、とんでもないことがあたり前のように言われ、学校でも教えられたんだ。こんなことは、二度とあっちゃあいけないよね。」 「ぼくは、おばあさんの話を聞いて、気づいたことがあります。それは、ぼくたちの今の幸せは、おじいさんおばあさんたちの悲しみに支えられている、ということです。」	
文 江	「うれしいことを言ってくれるね。話しておいて本当によかったよ。」 (記録集を見せて) 「わたしの戦争時代の取材に協力してくださった方で、その後、亡くなられた方が3人みえるそうです。私は、この本に書かれたことは、その方々の遺言だと思って大切にしないではいけなと感じました。」	
文 江	「そうだね。でも、みんなの近所には、もっといろいろな体験を持っているおじい	

子ども②男  文 江	<p>さん、おばあさんがいるよ。話を聞いてみるといいよ。」</p> <p>「はい、そうします。おばあさん、いろいろ教えていただいて本当にありがとうございました。」</p> <p>「なんのなんの。こちらこそ、ありがとうね。」</p>	
①	<b>&lt;第12場面&gt; フィナーレ 平和への決意 音楽</b>	4分
②	「戦争時代、八名学区だけで、229人もの人が、亡くなりました。」	音楽で入場
③	「人の命が大切にされない、本当に悲しい時代でした。」	
④	(以下、6年担任が作成：岡田あけみ、山本佳明教諭)	
⑤	「これまで、戦争のことを何も知らない私たちも、この台本と出会い、たくさん	
⑥	ことを知りました。」	
⑦	「戦争のおそろしさ、悲しさ、つらさ。」	
⑧	「数え切れないほどの悲劇」	
⑨	「私は、こんなのありえない! と感じました。」	
⑩	今、ぼくたちが生きる時代は 自分の好きなことに打ち込める	
⑪	友達と共に学び、遊べる 大切な家族といっしょにいられる	
⑫	そんな平和な時代 幸せな時代	
⑬	「これらはすべて、つらく悲しい戦争時代を生きた方たちの、	合唱
⑭	歴史の上に成り立っていることを知りました。」	
⑮	「それを胸に、この当たり前のように暮らしている恵まれた生活の中を、	
⑯	「今を大切に」生きていこうと思います。	
⑰	そして。この劇や授業から学んだことを、私たちも語り継ぎ、もう二度とこんな	計 47分
⑱	悲しい歴史を繰り返してはならないと訴えかけていきたいと思います。」	
⑳	この世の中に平和の鐘を鳴らしていこう	
㉑	「平和の鐘を！」	
㉒	合唱 HEIWAの鐘	
㉓	・演技力が必要な劇ですが、その人の気持ちになって演技ができれば、感動のドラマになると	
㉔	思います。きっと大勢の人が涙を流してくれると思います。6年生のがんばりに期待します。	
㉕	原作 「わたしの戦争時代」より	
㉖	脚本 安形 茂樹	
㉗	<演技指導> 6年生担任	
㉘	岡田あけみ先生 山本佳明先生 川合佐多子先生	
㉙	<合唱指導> 宮下亜子先生	

## < 配 役 >

※ 名前は実際の方と変えてあります。

- ・文江さん (現在) ① ( )
- (戦争時代) ② ( ) ③ ( )
- ・利夫さん ( )
- ・幸子 (6年生の妹) ① ( ) ② ( ) ・赤ちゃん (宏和) 人形で
- ・幼い女の子 (泣き叫ぶ子) ( )
- ・その母親 ( )
- ・子ども (第1・11場面 男子① ( )
- 女子① ( )
- ・6年生 ⑧ (行進, 竹やり訓練, 兵隊送り)
- 竹やり訓練 ( )
- 男子 一 ( ) 重利 ( )
- 正男 ( ) 健 ( )
- 女子 百代 ( ) すず子 ( ) 幸子 ( )
- 信子 ( ) 久子 ( )
- ・子ども ③ メンコをする子 見送りをする子
- ( ) ( ) ( ) ( )
- ・校長先生 ( )
- ・鈴木先生 ( )
- ・野沢先生 ( ) 軍服がよい
- ・兵事係 (宮城さん) ( )
- ・村長さん ( )
- ・出征兵士 (さとし) ( ) 帰還兵も演じる
- ・戦場兵士 ( )
- ・郵便屋さん ( )
- ・近所の人, 親せきの人 ナレーターと兼ねる
- <ナレーター> ( ) ( ) ( )
- ( ) ( ) ( )
- ( ) ( ) ( )
- ( ) ( ) ( )
- ・手紙の朗読 ( )
- <照明係> ( ) ( )
- <スポット係> ( ) ( ) ( )
- ( ) ( ) ( )
- <セットの移動, 電気係, 幕係等> できる子が全員で
- <音楽> ( ) ( )
- <写真と映像> ( )

## < 準備 >

- 背景 先生方のアイデアで
- 大道具 文江さんの家 (家の玄関, 部屋の仕切り=障子, 台所) 戦場 (樹木や草原, 岩)  
わら人形
- 小道具 校旗 (克己) 祝出征: 幟 (安形栄弼, 出征兵士) 手榴弾 (2個) 鍬  
お盆, おわん 垂れ幕 (八紘一宇) 竹やり (4本) 竹のムチ (先生用)  
遺骨箱 (白布で包む) メンコ サツマイモ 新聞紙 戦死証明書 封筒  
日の丸の小旗 赤ちゃんの人形 おんぶひも わたしの戦争時代記録集  
兵隊送りの音楽隊 (演奏できるか?)
  
- 衣装 軍服 鉄かぶと 水筒 軍帽 モンペ 粗末な服 学生服 背のう  
村長用背広 わらぞうり 手ぬぐい 白のエプロンなど
- 音 「クマゼミの鳴き声」 「赤ちゃんの泣き声」 「合図の鐘」 「飛行機が編隊で飛ぶ音」  
「手榴弾の爆発音」
- 音楽
  - ・ 「愛国行進曲」
  - ・ 「硫黄島からの手紙」
  - ・ 「海ゆかば」
  - ・ 「おくりびと」
- 覚えて歌う曲
  - ・ 「露営の歌」 (見送り全員)
  - ・ 「若鷺の歌」 (6年生の子ども)
  - ・ 出征兵士を送る歌 (見送る人全員)
- 記録映像
  - ・ レイテ島などでアメリカ軍の侵攻場面 (NHK特集より)
  - ・ 沖繩戦, 本土空襲, 原爆, 敗戦の場面 ( 同上 )
  
- 写真等
  - ・ ハガキ (軍事郵便)
  - ・ ○○さん, ○○さん, ○○さんの写真
  - ・ 召集令状 (山本昇さん提供)